
その後のJの9

黒作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その後のJの9

【Zコード】

Z5045V

【作者名】

黒作

【あらすじ】

Jの9、本多と高久のその後。カテゴリーが変わるので、別枠短編として投稿させて頂きました。

(前書き)

- * 青春（？）恋愛小説モードです。
- * モンハン要素が薄過ぎるのでタグから外しておつます。

結論から言つと、俺は高久とそういう仲になるんだけど、それは出会つてから8年が経つてからだつたりする。

事が終わつて息が落ち着くまでぼけつとしてたんだけど、なんか今更自分の匂いとか気になり出して俺は高久の上からどいた。シャワー浴びてなかつたんだ。流れ的に。夏なのに。

そそくさとどいた俺を、高久はきょとんと見ていた。妙に浮いたその間を『まかすためもあつて、ティッシュを箱ごととつて、さかさか間抜けた後始末をする。高久にも。高久は戸惑つてたけど、そこは押し切らせてもらつた。詳細は割愛……いや、ゴム持つとけよ俺、ほんとにさあ！ ちょっとこれについては猛烈に申し訳なく。

「あの、ごめん」

「え？」

高久がからだを起こす。見慣れた自分のタオルケットを寄せた仕草に思わず目をそらして、俺はうつむいて口早に言つ。高久といふとき、自分は高校の時に戻つている気がする。あんま変わつてもいなide。

「持つてなくて」

「あ、……うん。あたしも持つてなかつた」

照れた声だつた。てか、俺経験値があれなんであれだけど、ゴムつて普通女も持ち歩くもんなんだろうか。これ使つてつて高久が出してきた場合を想像して、なんかすごく萎えそうになつて、勝手だな。

買いに行きやよかつたんだよな。コンビニ行つて戻つて5分なんだから。でも、中断したくなくて。中断して、高久のその気がさめちゃうのがこわくて。なにより、俺がとめたくない。だつて高久にさわれるときが来るなんて思つてなかつた。

「高久、シャワー浴びる？」

まだ顔を見られなくて、ずいぶんぶつきらぼうな感じになってしまった。

「本多、先でいいよ。まだその……ちょっと痛いから

「あ、ごめん！」

「い、いいよいよ、謝らないでよ。それより、シーツ汚しちゃつ

て

「それは別に」

直前に言われていた通り、高久は初めてだった。俺は驚いた。かなり。すぐく。

だつて、高久はかわいいんだよ。えらい美人だとかスタイルがいいとかそういうんじやないんだけど、性格とか雰囲気とか言えばいいのかな。素直で、やさしくて、よく気を遣う。他の女と話すとひたすらつまんない俺の言葉が、高久と話すときだけは、なんかいい感じになつた。それは高久のおかげで、なんでもにこにこ拾つては、うれしそうに言葉を返してくれたから。自分と楽しそうに話してくれる女の子を好きにならない男つて、あんまりいないと思う。

それに、高久には付き合つてた男もいたはず。俺達はネットで会うほか、土日に俺の家で会うことも増えたんだけど（といつても驚くべき清らかさだったけど）、ある土曜、高久は男の車に送つてもらつてきた。多分俺に見られるつもりはなかつたんだろう、俺のアパートから少し離れたところで降りていた。でも、たまたま戻りが遅くなつた俺はそれを目撃して。それを高久に知られたくないって、携帯で謝りつつアパートに戻る時間を遅らせた。なんもないとはいえ、男の家に遊びに行くのを送る彼氏。シユールだな。まあ高久かわいいし、案外しつかりしてるし。俺も手出せるような度胸ないし。だってこの頃の高久つていつも膝くらいのかわいいスカートとかで来てたんだよ。俺安パイ過ぎる。

そりやさ、高久が俺の家に来てなにしてるつて、ふたりでぎゃー

ぎやー騒ぎながらゲーム、無言でひたすらゲーム、寝オチしてもゲーム、朝が来たらパンとかかじつてまたゲーム、もしくは昼まで寝てて外に飯食いに行くとか、内容はそんなんだつたんだけどな！高久が隣でかわいく体育座りしても、俺は淡々とホラーアクションを進めてたりだつたわけよ！ 高久はなんでそんなにゲームが好きなんだよ！ 俺もな！

いやだつて、えろえろしいことなんて、したいかしたくないかで言えばそりやしたいに決まつてゐるんだけど、俺はそういう空氣に強い抵抗があつた。俺は高久とゲームしてりや楽しかつたから、その時間が大切だから、下手に男女を持ち込みたくないて、俺が男だつてことも意識されるのがこわくて、それは多分高久も同じだと思つてた。俺達のあいだに、恋愛の話は出なかつた。時々、同級生の結婚話なんかは出たりしても、自分達の話は不自然なほどふれなかつた。

俺は多分、早いうちから高久を好きだつたけど、伝えようと思つたことはなかつた。妙な言い方になるかもしけないけど、絶対に振られるつもりはなかつた。気づかれなければ、伝えなければ振られることもないわけで、そうすれば関係は続いていくはずだつたから。たとえば高久がゲームに飽きるまでは。

だから、高久が誰かと付き合おうが、そんなことに俺は干渉しない。詮索もしない。毎週連絡をとつて、遊ぶときはひたすらゲームをやつて、たわいない、ただ楽しいだけの話を楽しんだ。

変化は、多分3週間前。どうでもいいんだけど、俺ここ数年、半月前とか1ヶ月前とかいう単語を使つた覚えがない。週単位で数えて、それは多分高久との付き合いのせい。

入社3年の俺に転勤の辞令が出た。会社の仕組み的にいざれあるつてわかつてたから驚きはしなかつたけど、これでもう高久と会つて遊ぶことはなくなるんだなつて思つた。いくらなんでもゲームするためだけに新幹線で1時間半とか来ないよな。鈍行だと4時間か

? 時間あまつてた大学の頃は、高久はちんたら2時間かけて遊びに来てくれたけどさ。電車乗るの好きとか言つて。

就職は地元で出来たから、またお互いの家が近くなつた。俺は実家にも戻れただけど、もうそんな気はしなかつたから会社近くに自分で部屋を借りた。それがここ。高久は変わらず遊びに来てくれる。転勤を告げたとき、高久は、そつか、と言つた。だから俺は観光地のどこそこがあるから、大型連休とか来たら案内するよ、とか言つた。恥ずかしい限りなんだけど、これ別に社交辞令とかじやなくて、高久ともしまして会えるとしたらそんなんだけだらうつて、わりと勇気出さなきや言えなかつたりで、チキンお変わりなく。六掘つて埋まりたい。しかもこれがゲーム以外での初めての誘いだつたつていう死にたい。

それから俺達の間にはなんか妙な沈黙が増えた。いや、これまで気にならなかつた沈黙が気になるようになつたつていうのが正しい。そのあとの週末に会つた高久はいつも通りに見えたけど、ともするとぼーっとしていた。多分俺も。そこで、さつきになる。

来週の土日に引っ越すから、その日取りやら確認して、手伝つよつて言つてくれてありがとうつて答えて、それからなんとなくモンハンの話になつた。俺達はもうとつくにモンハンをやらなくなつていたけど、まーあの頃若かつたよなとかいや今も変わつてねえ25になつても徹ゲとかどうだみたいな話で笑つてたんだけど、急に高久が黙りこんで、どうしたのかと思つたら突然帰るつて言い出した。待て夜中の2時だぞ。地元つていつたつて高久の家は電車使って40分くらい。

電車ないよ、いいタクシー拾つから、じゃあ俺車とつてくるからちょっと待つてて、いらない、どうしたんだよ、どうもしないしなんでもない、え、そんなこと言われたら俺傷つくんだけど！？普通にショックを受けた俺を高久はやつと振り向いて、俺がかわいいと思つてた目からぼろつと涙がこぼれて、思わずマジでなんてアホつぽい言葉をつぶやいたら怒りの形相でたたかれた。胸にこぶしだ

つたんだけど痛かつた。普通にとても。

そのまま顔を覆つて泣き出した高久を、抱き寄せたいとか思うんだけどこのチキンからだが動かない。彼氏いると思ってたし。ものすごく葛藤して頭をなでた。ニアミス以外で高久にはじめてさわった。

高久は真っ赤になつた目を拭いながら俺を見て、あのね、と言つた。へんなことしてごめん、嫌いにならないで。震えた声の訴えに、俺のバカはなんて答えたつて、なんで？ つて答えた。なんでは！ ねえだろ！ フリーズした高久にやつと自分の下手に気づいて高速で弁解する。いやちがう嫌うわけないから驚いた！ とつさにしては簡潔だった、上手にまとめられました。だめだ肉焼きネタ不完全燃焼。

なんか言わなきや、なんか高久が恥じ入つてる氣がするからなんとかしなきやと思つて、そうだ俺がもつと恥かきやいいんじゃね、たとえば振られるとか。あれだけ表に出さないようにしてたのに、大丈夫だよ高久、俺なんて高久のこと好きなんだからつて、告白した。そんな告白があるかつて殴られればよかつたのに。大体意味が通らない。俺の中で通つても、聞いてるほうはわからんだけ。と、思つてたんだけど。

高久は俺を見て再びフリーズ。俺も自分がそんなこと言つと思つてなかつたんでフリーズ。今思えばこの時の俺も相当テンパつてたんだな。高久がぱかつと口を開けて、あたしも本多が好きです、つて。驚いた顔のまま棒読みで。俺、あ、うん。また沈黙した。なんだこいつら。なんだ俺達。

どのくらい固まつてたんだろ？ 多分たいした時間じゃないけど、感じてる時間はえらい長かつた。高久、帰るの？ 聞いたら高久が顔を上げたから、帰らないでよ、と続けた。死ぬほど顔が熱かつた。高久の顔も真っ赤になつた。すげえ、ひとの顔が赤くなるのつてほんとにわかるんだ、はじめて知つた。つてことは俺もバレバレなんか？ 高久はうなずいてくれた。

どうしようもなく気持ちがはやつて、そのわりに強張りまくる腕を伸ばして、高久の手に触れた。高久は目をさらに見開いて俺を見て、でもそこに俺に対する恐怖とか抵抗とかそういうのが全然見つけられなかつたから、そのまま引き寄せた。ひじくゅつくりと顔を近づけたとき、高久がなにかつぶやいたのか、それまできゅつて閉じていた口を小さく開いた。白い歯が一瞬のぞいたのに俺は興奮したらしくて吸い寄せられるようにキスをした。頭がしびれて麻痺してつて意味同じなのかな知らないけど、触れ合わせるだけのキスを何度かするうち高久が俺の両肩に下からしがみついてからだを押しつけたから、やり返すみたいに強く抱きしめた。俺はずっと抱きしめたかつたんだって初めて知つて泣きそつになつた。すき、つて高久が泣いてるみたいな声でささやいて、うん、つて答えた。キスをしながらベッドに高久を倒して、のしかかるみたいな姿勢になつたら完全にスイッチが入つた。高久がいつもの定位置の俺のベッドにいなかつたとしても、移動する気にはならなかつたと思つ。……ゴムを買いに行く気にも。

高久の希望通り、シーツは捨てることになつた。まあそりや、自分の血がついたシーツを俺がずっと使い続けるのとかいやだらうな。高久はシーツを換えたベッドに座る。高久は俺の部屋にいるとき、いつもここに座つてゐる。ちなみに俺はデスク椅子か、床のでかクツショーン。

やつとシャワーを浴びてふたりともひとじこち……と思つたら、シャワーから上がつてきた高久の表情が暗い。てか、どうして正座してるんだ?

「高久、具合悪い?」

ちらりと俺を見てくる。といつが、睨まれた気がする。

「本多君」

「はい」

びくつと。正座する。なんで君づけなんでしょうか。

「本多君は、ひょっとして、けいけんしゃだったんですか」「はっ！？」

「思い返して類推するに、その結論が出てくるのです」「顔を真っ赤にして、大真面目な顔で高久が聞いてくる。

「えーと……怒ってる？」

「答えになつてません」

「なんで怒つてんだ！？　ええ、でもあんまり話したくないで。自分の名誉的に。」

「本多つてば」

じれっている。答えないなんてがんばりは俺には許されないよついです。

「はじめてではない、けど、でもはじめてみたいなもん、だよ？」「びぐびぐ。小動物モード。

「そういうお店とか？」

「違うよー。」

思わず全力で否定した。

「じゃあ、か、彼女がいたの？」

「彼女では、ないけど……」

「彼女じゃないひととしたの」

「いやその、ちょっとややこしい話で」

「ややこしい？　彼氏だったの？」

「違いますよ！　そういう発想はおやめなさいよー。」

「じゃあ早く答えてつてばー！」

高久ベッドばん。いやだつて本当にあんまり！

「えーと、大学の時の先輩と、……何回か」

回数を思い出そうとして、できなかつた。2、3回じゃなかつたような。でも6回もしてないよつた。気持ちよかつたとは思つけど、気持ちよくない記憶。

大学で入つていたゲーム研究会の集まりに、友達の少ない俺は卒

業してからもちょいちょい顔を出していた。ほんでその飲み会である女の先輩につかまつたわけです。そのひとはゲー研じゃなくて漫画研究会OGで、美人でスタイルがよかつた。噂はいろいろあって、飲み会にしか顔を出さないのは新品の男を探すためだとかいうのがあつて、とりあえず俺に限つてはそれは事実だつた。えらい飲まれて気がついたら俺つてば部室のとなりでパンツおろされてた。あんとき痛感させられたのは、俺は草食系だけどMつ気はゼロだつたつてこと。しかし俺新入生どころか23になつた社会人だつたんだけど。

それから何回か呼び出されて、何回かそういうことをした。先輩に恋愛感情はなかつた。なんで俺なんですかつて聞いてみたら笑われた。そのあと、本多君が好きだからよ、つてキスをされて、どうか質問自体があんまりにも意味がなかつたんだつてわかつた。俺と同じ状況の男は他に何人もいた。

ホイホイ行つた理由はただひとつ、俺が女とできることなんてこの先ないかもつていうことだつた。その時期も高久は会いに来てくれていたけど、高久には彼氏がいるし高久を裏切つてる気もしなかつた。ただ自分のことは裏切つていた。だから何度目かの先輩の呼び出しが、もうやりません、呼ばれてももう来ませんと伝えた。

先輩は少し話そつかと言つて、とてもたわいない話をした。本当につまんない、どうでもいい話だつた。世間話にも最低レベルだ。たまにしか顔を出さないくせに話し上手で人気者のこのひとらしくないと思つたけど、最後だからと付き合つた。

ふと、本当にふと思いついて俺は先輩に言つた。捨てられたいから捨つんですか。俺と先輩はろくに話したことなくて、やつてる時間のほうがずっと長かつたけど、体を合わせるつてなんかやっぱ通じたりするのかな。先輩は快樂が好きで破滅的だつた。だけど今、俺が先輩と縁を切るつて言つた今、このひとはすごく安心しているのがわかつた。伝えたら、傷ついた目をしたくせに。さみしそうな目をしたくせに。俺は言つべきじやなかつた。先輩の見開かれた目

が忘れない。先輩は、そうね、とつぶやいた。いらなくなつた
こたつみたいに見られると、ほつとするね、つて。俺はきつとしゃ
んとわかつてないけど、それってすゞく悲しい話つてそれだけはわ
かつた。どうしようもない長い沈黙を俺達はやり過ごして、先輩は
それじやあねと笑つて去つていった。メールは来なくなつた。俺も
もう飲み会に行かなくなつた。思い出すたびに胸をかきむしりたく
なるけど、でも俺は先輩を家に呼ぶことはできなかつた。したくな
かつた。そういうこと。

「どうこう」と?

人がどんだけ聞いてほしくないのよオーラを出しまくらうが、根
掘り葉掘り聞き出そうとした高久は、それも聞いた。

「高久さん、聞きすぎじゃないかな……」

「これまで聞かないでいたもん。本多聞いてほしくなさそつた
から」

口をとがらされたらかわいいと思わざるを得ない。俺ちょろい。
「どうこう」とだつたの。本多は、先輩をどう思つてたの
高久には適当に省いて話していただけど、それが悪かつたよつた。
つまり高久の聞きたい部分はそこ。

「このベッドは高久のだから」

これでいいだろ? 仮頂面になつたのは照れているからなので
ぜひ察して下さい。高久が顔を歪めた。

「このベッドで先輩とえつちしてたら、大変なことになつてたよ
「た、大変なこと?」

「大変なことだよ」

「ええ。高久は立ち上がり、俺の机の上をがちゃがちゃやりだ
した。なにをしてるのかと思つたら、油性マジック?

「なにしてんの?」

「名前を書くの」

何言つてるんだろーと思つたらベッドに押し倒されたよキャーな
んですか!?

「ちよ、高久つ！？」

Ｔシャツを思いつきりまくられる。きゅぽんつて聞き馴染んだ音がして、腹が猛烈にこそばゆく。

「やめ、くすぐつてえ！」

「我慢！」

待つて高久つてこんな子だつたつけ！ そして俺なんかよく襲われてる気がするなあ！ はははそつか受けか！ いやー！ えい、とか言つて高久が俺をひっくり返す。

「背中無理まじで無理！」

「おとなしくしなさ」つ！

あれ、命令されるとおとなしくなつちやう！ あほか、と/orうわけで俺は腹と背中に畠『Ｓ高校3・Ｅ高久里歌』と書かれた。結構でかい字で。

「なんてことを……」

もうＴシャツ脱げなくね。自分の腹に書かれた文字を見て呆然とする。てかこれ白いシャツとか着て汗かいだらにじむんじや。

まあこれで気が済んだだろうと高久を見たら、まだぶすくれている。

「まだ気が済まないの？ 俺は多少情はうつたけど先輩に恋愛感情とかなかつたし、えーと正直、抱いてるつていうか抱かれてただけでですね、それにもう一切連絡とつてないし今なにしてるのかもしらないし」

「やきもちは理屈じやないんだい」

高久が抱きついてきた。ぎゅーっと力を込めてしがみついて、顔を押しつけてくる。かわいくて愛しさが沸きあげてくるんだけど、でも抱きしめ返す以外にどうしていいかわからない。

「高久は、なんで彼氏としなかつたの？」

「誰のこと？」

怪訝な顔で言われた。あれ。

俺はさつきの説明でも、高久に彼氏がいるから、という部分は全

部省略した。なんか嫌味っぽい気がしたし、少しでも高久に彼氏のことを思い出してもほしくなかつたからつてのもある。

「俺の家に車で送つてきつたのは？」

「見てたの？」

「一度だけだけど」

「……一度しかないよ」

高久は眉をひそめた。

「会社の先輩に、しつこくされて。どうしてもデートしたいつていふから、じゃあこれから彼氏と会つので、家まで送つて下さつて言つたの」

「え、その先輩はそれを聞いたの？」

「うん。本多、鍵開けてくれてたでしょ。とつとと入つて鍵しめた」「いや、そういう男の車には乗つちゃいけないとと思うんだけど俺」「後部座席にふたり女の先輩がいたよ。前から相談してて、それじや一緒に行く、あんたが捨てたあとは温泉まで運転させるわ、つて、アシにしたみたい」

「えええ」

「そつちの先輩達には今もお世話になつてゐるよ」

いや、まあ、高久が結構しつかりしてゐるのはわかつてゐつもりだつたけれど……

「もうやだ、くやしい」

「え？」

「苦しこよお」

「どうして」

相変わらず抱きついたまま、俺のTシャツをつかんで泣いている。

「やきもちやだ」

痛くてたまらないと言つた風に、高久が泣く。

「じめん」

「もつと、もつと早く言えればよかつた。でも本多、全然あたしのこ

とやういう風に見てなかつたから

「じめん」

「そういうわけじゃなかつたんだけど」

「だつてあたしと会つてた間も先輩と会つてたんだよね。先輩とえつちしたあとにあたしと会つてたんだよね」

「そういう想像はやめたほうがいいって！」

「考えるだけ無駄、つていうか考えるだけ悪いじゃないか。

「やだああ！ 大丈夫だと思ったのに、本多はあたしだけじゃなくて女の子に興味ないんだと思ってたのに、いつまで経つてもあんまりかつこよくならないから大丈夫だと思ってたのに」

「どさくさでひどいことを言わないようになー？ 高久さん！？」

「やだ するい 本多の童貞とられた ！」

「おいい！」

俺のほうが赤くなるわ。

「高久、もーほんと落ち着いて、俺ほんとにずっと高久のことが好きだつたよ、高久しか好きじゃなかつたよ」

「ちょっと他の男とえつちしてくる」

「なに言つてんのー？」

あんまりなことを言つ出す高久にあらつと怒りを感じて、でもすぐ引っ込んであせりだけになる。いや[冗談]だとはわかつてるけど、俺はまだ高久に強く出られる気がまったくしなくて、自分のほうが惚れていると思っているわけで。

でも、俺の声が多分珍しく強くなつたのを、高久は気づいたらしかつた。

「やきもち、やいてくれる？」

「やくつていうか、……いややつこつのは[冗談]でもちょっと」

「……怒つた？」

高久が俺を見上げてくる。怒るところだつたのかもしれないけど、その目があんまり切なそつだつたからそんなもんは消えた。とりあえずキスをした。

「あたしね、付き合つてるとは思つてなかつたけど、でも似たようなことなんだつて思つてた。本多に彼女がいたらきつとあたしを呼

ばないと思つてたし、あたしも彼氏がいたら来なかつたよ

「……うん」

俺も、そう思つてた。だから、高久に彼氏がいると知つたとき、本当はショックだつた。でも俺あきらめが高速な上にデフォルトだから、そりやまあ俺ならともかく高久ならいておかしくないよな、しうがねーで聞きもしなかつたもんな。嫉妬する権利もないと思つて。

「「めん」

はじめてすまないつて思つて、謝つたら、高久の目にまた新しい涙が盛り上がる。俺のTシャツ着てる高久を抱き寄せて、けしからぬ再度の欲求は抑えつけて、何度も謝つた。高久は少しの間泣いていた。

「ばかみたい。全部、はじめてするのは本多とつて思つてた。プランニングジョンの新しいのも。手をつなぐのも。土日ほとんど押さえてたのになんで完全にすり抜けて他のひとと

「すみません、ほんと「めんなさ」……」

ペコペコペコペコ。告白直後にセックスしてセックス直後に浮気がばれたつて、考えてみたら若干、おかしいですね。

「これからはそんなことないですから。普通に俺、ちゃんとともてないですから」

「本多は鈍いんだよ。すなお君だから」

突然本名を呼ばれてびびる。

「見た目ぱつとしなくたつて、本多がまともでやさしいことなんて、そのうち絶対誰か気づくよ。女の子が見た目だけで判断するのなんかすぐ終わるんだから」

「だからきつとその先輩も選んだんだよ。すなお君だから」

「あのう、俺あんまりその名前好きじゃないんですけど……」

俺の名前は、直つて書いてすなおつて読む。でも呼びづらいから、親も友達もナオつて呼ぶ。だから、俺のハンドルはsをちつちやく

して、
S N a O₂

「いいの。ずっと呼びたかったの。本多のはじめは全部あたしがもひつて決めてたの」

「なにを言ひやがつてんだよー！」

わつぱつ俺が愛才が、
氣が、

ヤーは「俺が愛になれるやつ」にがんばってみたら高
久つてクラスでも一般女子で、だからゲーム好きで驚いたわけで、
俺がまともにできないようなおしゃれとかしてるとんでもだから気後れ
したわけで。

「ばかあつ」

「まぐできなぐても力丈夫とか語りほすだ二たのはーー！ ふたりとも下手ならいいよねとか言つはずだったのに、なにそつなくこなしてゐるの、信じられない！」

「え、結構びびつてたよー!?」
「じゃねえ!」
外で出すの慣れてないからむずかし、

何言つてんだつられんなああ！ 高久にぽかぽか殴られる。痛いんだ普通に痛いんだ。かわいくぽかぽかじやないんだ。つていうか高久そんなこと考えてたの！ 怒りの再燃したらしい高久に、また平謝り。で、ふと気づく。高久の妙な攻めモード。

二二二

二

「そういや、最初も齋宮だつたんだ」

おまえのヒツツをシツテイル。ハテざれたくなげは。

あれは悪かーたなあとは思ってなんたよ……」

とたんに弱腰になる。そうそう、高久は高圧的に出ておいて、でも俺が怒つてたらものすごく押しが弱くて、つていうかやっぱり高

「誘い受けたことか！」

いやだ！ そういう言わわれ方、すつごいいやだ！ ほんだ、

が、全然なんにもしてこない、からつ、悪い……

「してほしかつたの？」

驚いて素で聞き返してしまった。たたかれた。いやでもそうだ、俺全部高久からもらつてるんだ。きつかけを。これは申し訳ない、てか情けないなあ。

「え、じゃあ俺もできるだけリードします……結婚とか」
結婚？ もしもし俺？ いやプロポーズのつもりはなくて、そういう仲にはなつたから、あと他にリードが必要なイベントつていうと結婚しか思いつかなかつただけで、と思つたら高久がまたフリーズしている。

「あの、高久」

待て、今のは間違いとか言えないだろ、なんて言えば。

「する」

うおおい？ 高久の目がきらりきらじだした。背中をばしばしたたかれた。

「た、高久さん」

「そしたら、もう帰らなくていいね！」

満面の笑顔である。

「本多とずーっとゲームできるー！」

「そこーー？」

「えへへへへへへへ」

「そ、そんな即答でいいの？ 僕、来週転勤だよ？」

「うん、退社してからそつちいくね。一ヶ月かもうちょっとかかると思うけど」

迷いねえ。高久は俺の膝の上でじるじるしだした。やめてそこちよつとかたくなつてるの。高久が履いてる俺のハーフパンツがまくれて揃えた腿がのぞいてるし。

リード。すでにどれもこれもできてない気がするけど。

「さとか」

ぴたつと高久が、里歌がとまる。おーれーの一かおーまつかー。

里歌の顔も赤くなるのを見ながら抱き上げて、キスをした。Tシャツの中に手を入れた。

「……痛かつたら、入れないから、さわらせて」

これはへたれじやないよ、気遣いなんだよー。それにほらゴムは相変わらずないし！……あとで買つておこひ。と思つたらものすごくうれしかつた。

「いいよ。だいじょぶだよ」

里歌が俺の首に手を回した。部屋の壁の時計が4時とか差してたのに、そんなこたあどうでもいいアレでした。

4週間後に俺は里歌の家に挨拶に行って、5週間後に里歌が俺の実家に来た。6週間後に俺が地元に里歌を迎えて、婚姻届を出して転勤先に里歌を連れて行つた。俺らふたりとも本籍が地元だつたから。

ということで、俺達がどうなつたかの、これが結論で、スタートだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5045v/>

その後のJの9

2011年10月7日02時43分発行